

器は生きてゐる

南 館 忠 智

春四月、新学年の始まりとともにわたしの研究室は学生たちの頻繁な出入りで、急ににぎやかさをとり戻します。その用向きはいろいろですが、例年かならず襲ってくるものの一つに、卒業研究の下相談があります。

またたく間に三年の歳月が流れ去り、いよいよ最上級。これまで折あるごとに先輩からその多忙さを吹きこまれ、またその一端を自分の目で垣間見てきているだけに、恐ろしくすら感じられるこれから一年間の生活。卒業研究、教育実習、さらには就職と、未知なる世界に踏み入り、こなして行かねばならぬ。備えあれば憂いなし、とは巧く言ったもの。しかし、その備えの少なさが目下の大問題。とにもかくにも一度相談にのっていただく——と相成る次第のようです。

こうした慌てふためきようはやや過熱さみながら、また自己についての現状認識にも過小視傾向が目立つのですが、(あるいはそうだからこそ) 十か月足らずの後にキチンと人並み程度

(以上)の卒業研究を完成させるに至ります。この間に展開される一連の教授—学習過程は、実践的にも研究的にも(このような分けかたが許されるとして)今後いっそう体系的に追究されねばなりません。しかし、ここではたった一つのエピソードに触れるにとどめます。

*

それは、この春初めてハッと気づかされた、多分ちよっとしたでき事です。

相談にやってくる学生たちは、研究の方向性をどうやら見いだしたある一時期、ほとんど例外なしに、今回のこの研究で(このテーマに関する)すべての問題が一挙に解決するかのような幻想にとりつかれるのです。積極的な可能性を感じとる、というよりも、なにかそうした一大快挙をやりとげたい衝動に駆られる、と表現したほうが当たっているかもしれない。彼らの頭から、研究が進めばむしろ何もわかっていない自分が強

く意識されてくる、などという発想はきれいさっぱり欠落しているのです。

この現象自体は毎年のくり返して、わたしにとつて少しも驚くべき事件ではありません。内心ニヤリと笑ってから、重箱の隅を楊枝でほじくる、のたとえを引きながら、こと研究活動に關するかぎり、このたとえを消極的に解釈すべきではないこと。一見採るに足りない細かな事を問題にしているように見えても、その努力が大きな見取図の上にキチンと位置づけられているなら、そうした個々の努力の積み重ねこそが一大快挙につながる(ほとんど唯一の)途であることを、人類に特有の財産である文化遺産にも言及しつつ、力説するのが常だったので。そして、ことしもこれをやり始め、その途中でハッと息をのんでしまいました。半年ほど前に経験した、ささやかな大発見が、この時ほとんど前ぶれもなく鮮かによみがえったのです。

*

秋のある一日、四日市万古ばんこの黨元を訪ねたわたしは、いくつかのささやかな大発見をすることになりました。大地から掘り出された土くれが、その心を知り尽した工人こうじんの手で程良く練られ、各部分が形づくられ、一つに仕上げられ、文様を刻まれ、

そして炎に焼かれる。その一瞬一瞬に見せる器の貌(かたち)

は、常識としての予備知識をはるかに越えて、それを寄せつけないままでに厳しく変わりつづけるのです。その一つ一つの貌がわたしにとって素朴かつ純粹に驚きであり、いつか我知らず、器は生きている、と信じこんでいたのでした。この経験が、器は生きている、といういささか平凡すぎる言葉ではつきりと捉え直されるまでには、もうしばらくの時間を要しました。クライマックスは焼き上げられた急須が後日手許に届けられ再会した瞬間にやってきました。あの奇妙に大振りと感じられた急須が、今こうやってわたしの手のなかにすっぽりと納まっているではないか、これが至極当然といった風情をたたえながら。

今後わが家で使いこまれるほどに万古独特の色つやを見せてくれるであろうこの急須が、わたしの大演説をストップさせたのは、いったい、なぜだったのでしょうか。

重箱もまた器なら、生きた器であるかぎり、変貌しつづけるであろう。となると、その一部分としての隅を位置づけ読みとる見取図をつくることこそ、言うは易く行うに難い仕事のはず。あまり気軽に調子良く言い放ってはいけない——という自戒の念のなせる業だったようです。

(三重大学)